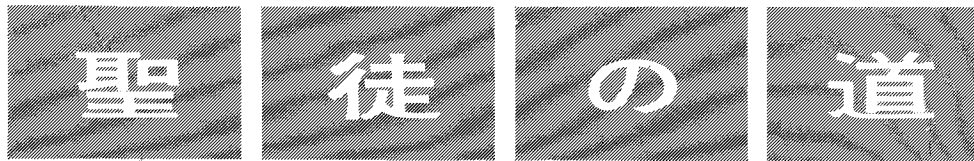
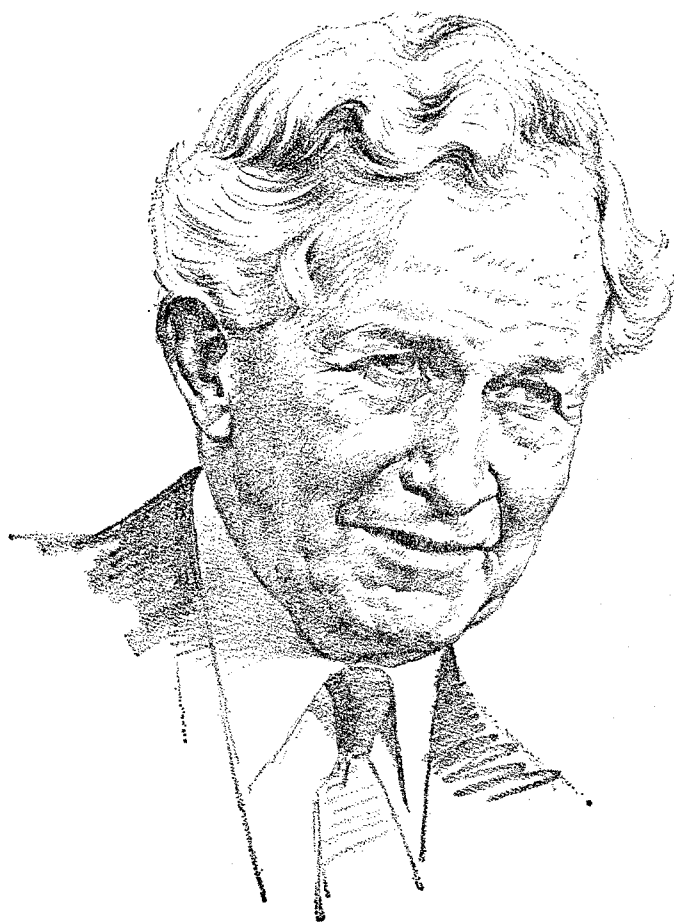


も く じ

予言者のことば……………心の 錨……………大管長 デビッド・O・マッケイ……………二九八	伝道部長メッセージ……………偉大なるモルモン宣教師……………ポール・C・アンドラス……………三〇一	末日聖徒イエス・キリスト教会の墓苑について……………三〇八	モルモンの教義……………エライヤス・エライジャ・エリヤ……………佐藤 竜 猪……………三〇九	はじめて霊の子がさずかって……………福田 八重子……………三一四	モルモン家庭訪問……………鈴木家を訪ねて……………三一六
ヤンガージェネレーション					
ちがった道にさまよう……………マリオン・D・ハンクス……………三二〇	私の叫び……………四枚田 民 子……………三二〇	祈 その1……………鎌 倉 弘 子……………三二三	その2……………宮 城 光 子……………三二四	私は立派なモルモンになりたい……………若 松 道 範……………三二四	私の証詞……………柳 田 喬 夫……………三二五
質問への答……………安息日をいかにすごすべきか……………ジョセフ・フイールディゲ・スミス……………三二六	実生活の教訓……………マリオン・D・ハンクス……………三三一	二分半の話より……………谷 保 良 子……………三三三	聖徒の道研究会……………名古屋支部……………三三四	六月地方部大会予告……………三三七	アロン神権……………ブランチティーン・レックス……………三三九
メルケゼデク神権……………第一長老定員会の計画……………三四一	日曜学校ガイド(七月用)……………三四二	子供日曜学校ガイド(七月用)……………三四七	M I A リーダー(七月用)……………三四九	扶 助 協 会……………三五三	末日聖徒イエス・キリスト教会歴史科……………ジョセフ・フイールディゲ・スミス……………三五四
伝道本部だより……………三五九					

1961年6月号





大管長 デビド・O・マッケイ

心の錨

大管長 デビッド・O・マッケイ

もう何年も前のことであるが、私たちの乗って行った立派な汽船「マラマ号」はラロトンガ島のはるか沖合に錨をおろしたので、上陸したい乗客たちは船着場まではしげに乗って行かねばならなかった。なせもつと岸に船をよせないのかと乗客たちがたずねたとき、オールドウエル船長はだまって岸の方を指さした。そこには暗礁にのり上げた船の巨大な肋材を白波が嚙んでいた。危険な港の底にひそむさんご礁に近よりすぎた船の残骸は、あまりにもきびしいそして厳肅な事実を私たちに思い起させた。

数年前に、その難破船の船長はその港に錨をおろした。いつもの状態なら万事安全で都合よく行ったはずであったが、その時思いがけなく突風が起った。船長は船を港外に避難させようと全力をつくしたにもかかわらず、ついに愛船を岸礁に乗り上げさせる始末になってしまった。しかし、私たちの乗って行った汽船「マラマ号」の船長は、ただ単に錨をおろしたというだけではなく、充分安全なところに錨をおろしたのであった。

人が心の錨をそのようにおろすならば立派なものである。それは真理に心の錨をおろすからである。その場合に人生はまことによるこびとなる。あらゆる人生につきものである試練と艱難がおそって来ようとも、このような人は心によりどころのない人の知らないなぐさめをもっている。激情のあらしや疑惑の暴風雨は、心によりどころをもっていない人を失望の暗礁に難破させるかも知れない。しかし、激情のあらしや疑惑の暴風雨がいかに荒れ狂っても、それらは信仰のある人々をいかんともすることができない。

今日世人が最も必要とするのは信仰である。しかも天に生きた神がましますこと、この神は單なる力ではなくて、世人の祈りを聞いて答えたもう父なる神、われらの主なる救い主、イエス・キリストの父なる神であることを信ずる信仰が最も必要である。

神を信ずる信仰は、もともと純粹に個人の問題である。それはあなた自身の信仰でなくてはならない。同時に、私自身の信仰でなくてはならない。また本当の信仰であるためには、知と情とから出て来なくてはならない。

信仰の上につき心願の錨をおろすということは、すべて誠実な人々が心に抱いているまじめな願ひであるが、「どのようにして」という大きな質問はいつも声高く答えを要求している。しかし、幸いにも聖典の中に一つの答えが示してある。モルモン經の中でイテルは「すべて神を信ずる者はこの世よりも勝っている世、すなわち神の右手の場所を少しも疑わずに望むことができ、このような望みは信仰から生じて人の心の錨になるものであるから、この錨のために人はしっかりとびくともせぬようになり、いつも善い行いをして神を崇めるようになることができる」(イテル書十二〇四)とはっきり言っている。

これは本当のことであるから、たしかに私たちは心の切な願ひに對する答えを見出している。何とならば、神が近くにましますと感ずること、私たちの父なる神としてゆるぎのない確信を以て神を信ずること、神は神の子らのために「救いの計画」を有ちたもうことを知ることなどは、人類が知っている最もたしかなまた最も安全な心の錨であるからである。しかしここでイテルが「神を信ずる者は(すなわち神を信仰する者は)」と言っていることに注目したまえ。「信用すること」「信仰すること」の間には違いがある。私が長老の使用する「レッスンの手引き」に一度書いたことがあるように、私たちはある人物を信仰していなくても、その人物の言うことを信用することができる。しかし、もしも私たちがある人物を信仰しているならば、それは私たちがその人物の人格をほめたたえ、その立派な模範にならいたいという意味を含んでいる。当然、私たちは、自分の理想の中に見るいろいろの美德を身につけるのである。

さて、このことを考えに置いて、私たちはほんとうにイエス・キリストを信仰しているかどうか、心からまじめに自分自身に問うてみようではないか。もしも私たちがほんとうにイエス・キリストを信仰しているならば、私たちはたしかに、「救い主」の男らしさに劣らぬ男らしさをもちたい、その優しさとおなじ優しさを育て上げたい、その純まことさとおなじ純まことさがもちたい、「救い主」が人を許したもうたとおなじように人を許したい、またその罪のない完全な生活を、いつも私たちをみちびく明星にしたい、私たちのただ一つの望み、私たちの切なる願いにしたいと言わざるを得ないにちがいない。

神を信ずる信仰、世の救い主であるイエス・キリストを信ずる信仰、一生を通ずるみちびきとしてイエス・キリストの福音を信ずる信仰、心の底からわいて出る故に真正である信仰、気高いそして神のような行いを起させる信仰、このような信仰こそびくともしい、無限に大きい心の錨いかりである。

このような信仰こそ、主の使徒たちに靈氣を吹きこんだ信仰である。このような信仰こそ、人々にいやしめられ迫害せられた初期のクリスチャンたちに、殉教の時にすら力と平安とを与えた信仰である。このような信仰こそ、少年予言者ジョセフ・スミスに天が開かれた信仰である。また、このような信仰こそ、末日聖徒イエス・キリスト教会の指導者たちの間に見られる靈性を高める力である。

このような信仰をもつ者はみな、たとえ暴風雨あらしの吹きすさぶ世の中で木の葉のように翻弄ころもされようとも、最も安全なそして最もしっかりとした心の錨をおろしているのである。それを得んことを祈れ。それを得るために努力せよ。この心の錨がなかったなら救いはない。

誰もみなエマソンと共に「神よ、みこころをいつでもよるこんで行うすなおな心のそなえをさせたまえ」と祈るのはよいことである。それであるから、世の中をもっとよくする責任はあなたのものである。あなたばかりでなく、イエス・キリストの御名を口にすると十数億のクリスチャンたちの責任である。

偉大なるモルモン宣教師たち

ポール・C・アンドラス



もしも宣教師がなかったらどうでしょう。か、日本にも韓国にも沖繩にも今日一人の教会員さえいないでしょう。実際、宣教師がなかったら全世界にあるモルモン教会に今日一人の教会員さえ見られないであまりよろ。この事実はこれまであまりに多くの教会員が、あまりにしばしば重くみないで過ごしていることでありますから、今月は北部極東伝道部の全教会員の注意をこのことに向けたいと思います。

ちょっと落ちついて考えてみるならば、私たち一人一人がこの教会の会員になったのは誰の力によりますか、また教会員になったために与えられるすべての祝福は誰の力によりますか、みんな宣教師たちのおかげによるものであることがすぐにはっきりとわかります。ヒーバリー・J・グラント長老（後の大管長）と長老と共に働く三人の宣教師とが、千九百一年に日本へ着いたとき、日本中に住むすべての日本人の中に、一人の教会員さえありませんでした。これらの最初の

宣教師とこれにつづいて日本へ来た多くの宣教師たちは、文字通りに真の福音の喜びのたよりを日本人の人々のところへもって来ました。日本伝道部は一時閉鎖されましたが、第二次世界大戦が終ると再び宣教師が日本へ派遣され、また多くの宣教師が千九百五十六年の四月に歴史上始めて韓国と沖繩とへ派遣されました。これらの国々に於て、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員である米国人たちもいくらかの人々を改宗させて教会員にしましたが、日本韓国沖繩にある各地方の教会員の大部分は、上に述べた宣教師たちの力によって教会員になったのであります。末日聖徒イエス・キリスト教会の会員である米国人によって教会員になったと言いますが、それでもやはり宣教師の力で教会員になったのであります、というのは、その軍人たちが教会員になったのも宣教師の力によるからであります。これと同じように、直接宣教師によって導かれなくて教会員になった人々もなお一人のこらず、その教会員になったのは宣教師の力によるのであります。というのは、その人の先祖までさかのぼると、どこかで誰かが宣教師に直接働きかけられた結果教会員になっているからであります。あなたがこの教会の教会員になったのは宣教師のおかげであります。私はこのことをいくら強調しても強調しすぎることはないと信じています。

モルモンの宣教師たちは、これまでいつも多大のぎせい

を自らはらって福音を教えに出て行っております。たとえは、千八百三十九年には十二使徒定員会の全員が英国へ宣教師となつて行くよう召しを受けました。この人々はイリノイ州のノーヴーから英国へ出発しましたが、当時教会はノーヴー市をちようど建てていたところでありました。「末日聖徒イエス・キリスト教会大歴史」の中には、この人々の出発について次のような記事が見えております。

「ウイルフォード・ウッドラフとジョン・テイラーとは、十二使徒定員会の中から最初に召されて、ノーヴーから英国へ向けて出発した長老たちであった。ウッドラフ長老は当時モントローズに住んでいたから、ブリガム・ヤング長老がカヌーに乗せ自ら漕いでミシシッピー川をわたした。岸につくと、ウッドラフ長老は郵便局の近くにあった底革かぶ用の革かわの上に横になって休息した（彼は当時病気のため衰弱していた）。その時予言者がそこへやってきて「おやウッドラフ兄弟、もう宣教師の働きをするために出発したのかい」と彼に言った。するとウッドラフ長老はこれに答えて「私は宣教師になるよりもむしろ解剖室に置かれるような気がしていますし、またそうなりそうです」と言った。すると予言者は彼に言った「君は何のためにそう言ったのか」、「すぐに起きて行きたまえ。万事都合にゆくにちがいない」と。

それから間もなくウッドラフ長老はジョン・テイラー長

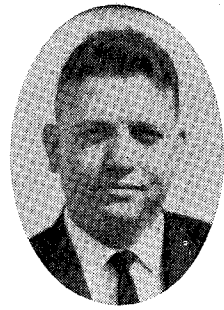
老と一しょになり、二人つれ立って旅路につきました。その途中、二人はパーレー・P・プラット長老の側を通りすぎましたが、その時彼ははだして何もかぶらずシャツ一枚になって、家を建てるための丸太を切っていました。彼は自分の側を通りすぎる兄弟たちに別れのあいさつを送り、せんべつとして財布をおくりましたが、その中には一文も入っていませんでした（金がなかったのです）。すると、そのすぐ近くで、プラット長老と同じようにシャツ一枚で働いていたヒーバー・C・キンボール長老がやってきて「パーレー兄弟が君たちに今財布をおくったから、僕のもっている一ドルをその中へ入れてあげよう」と言いました。そして四人は互いに祝福をかわした末、外国でまた会おうと再会を約して別れたのであります。

八月の二十九日には、パーレー・P・プラット長老とその弟のオルソン長老とが自分たちの馬車に乗り、ノーヴーに別れを告げて英国へ向いました。

また九月の十四日には、ブリガム・ヤング長老がモントローズにある自宅から英国へ出立しました。ヤング長老の出发はその病気のためしばらく遅れていましたが、出発の時になつてもまだ弱っていたために、自宅からたった百五十メートルばかりの所にある渡し場まで人の手を借りて行かねばならないほどでした。ヤング長老の子供たちは当時みな病気にかかつており、妻は生後わずかに十日の赤児をか

偉大なるモルモン宣教師たち

ポール・C・アンドラス



もしも宣教師がなかったらどうでしょう。日本にも韓国にも沖繩にも今日一人の教会員さえいないでしょう。実際、宣教師がなかったら全世界にあるモルモン教会に今日一人の教会員さえ見られないであまりましよう。この事実はこれまであまりに多くの教会員が、あまりにしばしば重くみないでのごしていることでありますから、今月は北部極東伝道部の全教会員の注意をこのことに向けたいと思います。

ちょっと落ちついて考えてみるならば、私たち一人一人がこの教会の会員になったのは誰の力によりますか、また教会員になったために与えられるすべての祝福は誰の力によりますか、みんな宣教師たちのおかげによるものであることがすぐにはっきりとわかります。ヒーバリー・J・グラント長老（後の大管長）と長老と共に働く三人の宣教師とが、千九百一年に日本へ着いたとき、日本中に住むすべての日本人の中に、一人の教会員さえありませんでした。これらの最初の

宣教師とこれにつづいて日本へ来た多くの宣教師たちは、文字通りに真の福音の喜びのたよりを日本人の方々のところへもって来ました。日本伝道部は一時閉鎖されましたが、第二次世界大戦が終ると再び宣教師が日本へ派遣され、また多くの宣教師が千九百五十六年の四月に歴史上始めて韓国と沖繩とへ派遣されました。これらの国々に於て、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員である米国軍人たちもいくらかの人々を改宗させて教会員にしましたが、日本韓国沖繩にある各地方の教会員の大部分は、上に述べた宣教師たちの力によって教会員になったのであります。末日聖徒イエス・キリスト教会の会員である米国軍人によって教会員になったと言いますが、それでもやはり宣教師の力で教会員になったのであります、というのは、その軍人たちが教会員になったのも宣教師の力によるからであります。これと同じように、直接宣教師によって導かれないうで教会員になった人々もなお一人のこららず、その教会員になったのは宣教師の力によるのであります。というのは、その人の先祖までさかのぼると、どこかで誰かが宣教師に直接働きかけられた結果教会員になっているからであります。あなたがこの教会の教会員になったのは宣教師のおかげであります。私はこのことをいくら強調しても強調しすぎることはないと思っております。

モルモンの宣教師たちは、これまでいつも多大のぎせい

を自らはらって福音を教えに出て行っております。たとえば、千八百三十九年には十二使徒定員会の全員が英國へ宣教師となつて行くよう召しを受けました。この人々はイリノイ州のノーヴーから英國へ出発しましたが、当時教会はノーヴー市をちようど建てていたところでありました。

「末日聖徒イエス・キリスト教会大歴史」の中には、この人々の出発について次のような記事が見えております。

「ウイルフォード・ウッドラフとジョン・テイラーとは、十二使徒定員会の中から最初に召されて、ノーヴーから英國へ向けて出発した長老たちであつた。ウッドラフ長老は当時モントローズに住んでいたから、ブリガム・ヤング長老がカヌーに乗せ自ら漕いでミシシッピー川をわたした。岸につくと、ウッドラフ長老は郵便局の近くにあつた底革かひ用の革かわの上に横になつて休息した（彼は当時病氣のため衰弱していた）。その時予言者がそこへやってきて「おやウッドラフ兄弟、もう宣教師の働きをするために出発したのかい」と彼に言った。するとウッドラフ長老はこれに答えて「私は宣教師になるよりもむしろ解剖室に置かれるような氣がしていますし、またそうなりそうです」と言った。すると予言者は彼に言った「君は何のためにそう言ったのか」「すぐに起きて行きたまえ。万事好都合にゆくにちがない」と。

それから間もなくウッドラフ長老はジョン・テイラー長

老と一しよになり、二人つれ立って旅路につきました。その途中、二人はパーレー・P・プラット長老の側を通りすぎましたが、その時彼ははだして何もかぶらずシャツ一枚になつて、家を建てるための丸太を切っていました。彼は自分の側を通りすぎる兄弟たちに別れのあいさつを送り、せんべつとして財布をおくりましたが、その中には一文も入っていませんでした（金がなかつたのです）。すると、そのすぐ近くで、プラット長老と同じようにシャツ一枚で働いていたヒーバー・C・キンボール長老がやってきて「パーレー兄弟が君たちに今財布をおくつたから、僕はそのもつている一ドルをその中へ入れてあげよう」と言いました。そして四人は互いに祝福をかわした末、外国でまた会おうと再会を約して別れたのであります。

八月二十九日には、パーレー・P・プラット長老とその弟のオルソン長老とが自分たちの馬車に乗り、ノーヴーに別れを告げて英國へ向いました。

また九月の十四日には、ブリガム・ヤング長老がモントローズにある自宅から英國へ出立しました。ヤング長老の出發はその病氣のためしばらく遅れていましたが、出發の時になつてもまだ弱つていたために、自宅からたつた百五十メートルばかりの所にある渡し場まで人の手を借りて行かねばならないほどでした。ヤング長老の子供たちは当時みな病氣にかかつており、妻は生後わずかに十日の赤兒をか